時評

新たなる我々の発見
～福島泰樹の現在地～

高山邦男

日本歌人クラブでは毎年四つの賞の表彰をしていて、そのうち日本歌人クラブ大賞は、日本歌人クラブの伝統と蓄積を反映し、地道に励み、斯道に貢献している歌人を顕彰するとして設立された。第一四回は福島泰樹が『百四十字、老いらくの歌』（皓星社）を中心とした永年の功績で、第一五回は伊藤一彦が『牧水・啄木・喜志子　近代の青春を読む』（ながらみ書房）を中心とした永年の功績により受賞した。

伊藤と福島は早稲田大学第一文学部哲学科の同級生で、福島が伊藤を早稲田短歌会や心の花への入会を誘い、短歌の道に導いたことは有名な話。歌人クラブ四賞の授賞式でもある定期総会が五月二十五日（土）に明治神宮参集殿にて行われ、講演講師の福島と受賞者である伊藤が揃い、学生時代から、六〇年以上の付き合いの中で変わらない友情を感じさせてくれる機会になった。福島による講演の演題は「自伝風　私の短歌の作り方」だったのだが、なかなか本題に進まず、「このままでは、伊藤の話で終ってしまいそうだ」という学生時代の話の中で、「なあ、伊藤」と呼びかけたりする独特な話術で会場は大いに盛り上がった。

福島は毎年のように歌集や評論集、随筆集を出版し、毎月欠かさず絶叫コンサートを続けている。このエネルギッシュな姿は若き日に『バリケード・一九六六年二月』で歌壇のスターになってから八十路を超えた現在でも変わらない。ただ、この圧倒的パフォーマンスに熱狂的な支持者がいる一方で、現代短歌の本道から次第に乖離していったようにも見えていた。

時代の詩情の最前線で歌っていた福島が次第に過去のことばかり歌う歌人になり、現代に対する挑発力が失われているのではないかという事が私の疑念であった。それは、『中也断唱』、『朔太郎、感傷』など過去の詩人に己の感傷を重ねる詩法がどれだけ現代の状況を打つ力になっているのかという私の質問でもある。ただ、最近の福島の言動、仕事をつぶさに見ていくと小さな我を超えていく大きな我を感じるようになった。

・祖母に背負われ声を嗄らして泣きじゃくる無差別絨毯爆撃の夜
『空襲ノ歌』

・泥の川に朝日を浴びてよこたわる白い便器のような妹
・南葛飾郡亀戸町に吹く風はなまぬるく吹く哭きながら吹く
『大正十二年九月一日』

・古井戸に投げ捨てられた宗一の小さな首よあわれな首よ

これらの歌の作中主体は、福島という詩人の魂が想像力によって立ち上げた〈我〉である。福島は言う。

私は、この一人称詩型短歌の〈私〉を逆手にとり、焼け死んでいった死者たちの〈私〉に降り立ち「不特定多数の〈私〉」の、その痛苦と悲嘆の数々を短歌をもって体験してゆくのである。（「自伝風　私の短歌のつくり方」日本歌人クラブ講演）

福島の過去語りは、もう言葉を発せない人に代わって、詩を紡ぐ〈我〉の再生であり、朗読することで私性を一般化する絶叫コンサートを含め、福島の一途な活動が〈個〉に閉じこもりがちな現代短歌に新しい我々の詩の可能性を見せてくれている。